

4) 「フランス語の冠詞」(松原秀治著)について 工藤 進

(月刊『言語』大修館 2003 年 10 月号より転載)

習い覚えた英語やフランス語で実際に文章を書こうとすると、もっとも難儀するのは、外国語の身体性とでも言うべき冠詞の扱いである。フランスのある大学との共同で、数年前から年刊誌を始めた私は毎年かなり長いフランス語を書かねばならない。自分の文章は自分で責任をとりたから一所懸命直すが、かなり直したつもりでも冠詞使用の不自然さは残る。冠詞使用の不適切は選択した用語の不適切、文章内容の不適切と通底する。この冠詞の壁を乗り越えるには文法書や理屈はあまり役にたたず、結局生きたフランス語と長い間格闘するしか方法はない。日本の困難な時期に、この壁に挑戦した人がいた。

「フランス語の冠詞」(白水社 1978)の著者、松原秀治氏は「学校でフランス語を習って」から、外務省の「官房翻訳課」に勤められた。仕事は和訳もあるだろうと思ったが和訳はおこなわず、仏訳と英訳だけだったという。フランス語を書くということになれば、冠詞の使い方がわからないと仕事にならない。他の文法的事項はどうにかなっても、冠詞についてはどうしようもなかった。外務省には当時、フランスおよびイギリスの一流の法律家がいて、日本人の書いた仏文、英文を添削してくれたり、冠詞の要点などを教えてくれたようだが、松原氏の「心のなかには晴れたものではなかった」。氏は、「このままでは手をこまねいて死をまつようなものだ」から、自分で考えてみるほかはないという考えにいたり、「Essai sur la syntaxe de l'article en français moderne」(パリ 1932 年)を自費出版する。本書はそれを基にした「現代仏蘭西語に於ける冠詞の用法」(白水社、昭和 18 年)の改訂版である。

松原氏の冠詞論は、限定、総称を示すものとしての定冠詞(I)、差別、無差別の不定冠詞(II)、部分冠詞(III)、「名詞 de 名詞」という構造での冠詞の扱い(IV)の四章と、付録としての「冠詞の歴史」からなる。この本が後の類書にすぐれてユニークであるのは研究が実にまっとうな動機から生じていることである。実作に密接する文法書でありながら、この文体には著者の気品とフランス語への愛が見事に結晶している。ほとんど文学作品である。

先人にはこうしたフランス研究の熱気があった。松原秀治の仕事は第二次大戦を挟んで行われた。パリで出版した本の日本語版が出たのが、戦争の真っ最中の昭和 18 年である。私がお見かけした頃の先生は見事な銀の短髪だった。